

## 女子大学生における乳児感情の読み取りと心理的特徴の関連

松澤 正子

### 問題

養育者による乳児感情の読み取りの個人差は、乳児の感情発達の重要な要因とされている (Inoue, Hamada, Fukatsu, Takiguchi, & Okonogi, 1993)。これまで、虐待のリスクの高い母親ではポジティブ感情を読み取りやすいこと (Butterfield, 1993) や、抑うつ母親ではネガティブ感情を読み取りやすいこと (Zahn-Waxler & Wagner, 1993) などが報告されてきた。また松田 (2015) は、回避的な愛着スタイルの母親では曖昧な表情をポジティブに読み取り、アンビバレントな愛着スタイルの母親ではネガティブに読み取る傾向があることを示している。

これらを踏まえ筆者は、乳幼児を養育中の父母を対象に、乳児感情の読み取りの個人差についての生理学的な基礎と育児感情との関連について検討を行った。その結果、回避的な愛着スタイルをもつ父母や、抑うつ傾向の父母では、いずれも乳児感情を読み取る際の前頭前野の活動性が弱く、またそのような父母ほど育児困難感が高い傾向が示された (松澤, 2017)。しかし、これらの父母の乳児感情の読み取り方には傾向を見いだすことはできず、先行研究と一致しなかった (松澤, 2017)。この理由として、第一にこの研究の参加者数の少なさ (22名) の問題が挙げられるが、脳活動の計測を伴う実験への父母の参加者の募集と実施が容易でないことから、この問題をすぐに解決することは容易でない。一方、もうひとつの理由として、乳児の表情の違いによって読み取り傾向に違いがある可能性が考えられる。例えば、不安定な愛着スタイルの者や抑うつ傾向の者は、特定の表情からはネガティブ感情を読み取りやすいが、別の表情からはポジティブ感情を読み取りやすい、といったことがあるのではないだろうか。

そこで本研究では、参加者のもつ心理的特徴と乳児感情の読み取り傾向との関連のあり方を、

改めて詳細に検討することを目的とする。対象は募集が比較的容易な女子大学生とし、心理的な特徴としては、先行研究で取り上げられてきた‘愛着スタイル’と‘抑うつ傾向’に加え、関連が予想される‘共感性’や‘育児に対する意識’も取り上げる。

### 方法

#### 参加者

東京都内の女子大学で心理学関連の一般教養科目を受講する学生229名 (平均年齢19.0歳) を対象とし、授業時間を利用して集団で実施した。

#### 刺激図版

日本IFEEL Pictures研究会の許可を得て、日本版IFEEL Pictures (JIFP) 第2版の30枚の乳児表情写真 (日本IFEEL Pictures研究会, 2003) を用いた。これは、日常場面での乳児感情の読み取りを捉えるために開発された「IFEEL Pictures (Infant Facial Expression of Emotion from Looking at Pictures ; IFP)」 (Emde, 1993) の日本版 (Inoue et al., 1993) で、1歳児が日常生活の中で見せた様々な表情の顔写真から成る写真集である。はっきりしない弱い表出の写真や、複数の感情が混ざっているかのような多義的な性質を持つ表情の写真が含まれる。

#### 感情読み取り課題の手続き

参加者には、教室前方のスクリーンに1枚ずつ呈示される乳児表情写真を見て、乳児の感情を読み取り、事前に配布された回答用紙にP (ポジティブ) かN (ネガティブ) かの2件法で回答することをお願いした。その際、「回答には正誤がないため心に最初に浮かんだ方を回答する」よう教示した。なお、刺激呈示にはPowerPoint (Microsoft製) を用い、問題番号を4秒間呈示した後写真を7秒間呈示し、この間に回答を求めることを繰り返した。30枚の表情写真の呈示順序は

JIFP第2版に従った。

### 心理的特徴の測定

感情読み取り課題終了後、質問紙への回答を求めた。質問紙は1) 愛着スタイル、2) 抑うつ傾向、3) 共感性、4) 育児に対する意識、の4種類の心理的特徴を測定するための心理尺度から成る。

- 1) **愛着スタイル18項目** 戸田(1988)の内的作業モデル尺度を用いた。「安定(e.g.私は知り合いが得意やすい方だ)」「アンビバレント(e.g.人は本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある)」「回避(e.g.人に頼るのは好きでない)」の3下位尺度について、普段の自分にどの程度当てはまるかを、“あてはまらない(1点)”から“あてはまる(4点)”の4件法で回答する。
- 2) **抑うつ傾向20項目** Seif-rating Depression Scale (SDS; Zung, 1965)の日本語版(福田・小林, 1973)を用いた。現在の状態(e.g.気が沈んで憂うつだ)について、“ないかたまたま(1点)”から“ほとんどいつも(4点)”の4件法で回答する。
- 3) **共感性25項目** 加藤・高木(1980)の情動的共感性尺度を用いた。「感情的暖かさ(e.g.私は映画を見る時、つい熱中してしまう)」「感情的冷淡さ(e.g.私は人がうれしくて泣くのをみると、しらけた気持ちになる)」「感情的被影響性(e.g.私は感情的にまわりの人から影響を受けやすい)」の3下位尺度について、1)と同様の4件法で回答する。
- 4) **育児意識13項目** 青木・松井(1988)の母性準備性尺度を、佐々木(2007)が親性準備性尺度に改変して行った研究の結果に基づいた。「育児労働への積極性(e.g.育児は素晴らしい仕事だと思う)」「育児労働の肯定(e.g.育児によって自分自身もまた成長できると思う)」「育児労働の否定(e.g.育児をしている間に、世の中の動きから取り残されてしまうと思う)」「育児労働への抵抗感(e.g.育児はつらい仕事だと思う)」の3下位尺度について、考えや気持ちを1)と同様の4件法で回答する。

### 倫理的配慮

実施にあたっては、研究の目的と方法について

の説明を行ったうえで、どの段階であっても研究参加を拒否する権利があること、参加を拒否しても不利益が生じないこと、回答は無記名であり、データは責任をもって厳重に管理すること、回答用紙への記入をもって研究協力の同意を得たものとみなすことを伝えた。

## 結果と考察

### ポジティブ回答率と尺度得点との関連

呈示された30枚の乳児表情写真のうちポジティブと回答した写真の割合(ポジティブ回答率)は、最も高い者では90.0%で30枚中27枚の写真にポジティブと回答をしたのに対し、最も低い者は23.3%で30枚中7枚の写真にしかポジティブと回答しておらず、回答は個人によって大きくばらついた。同じ表情写真に対する感情の読み取りには個人差があり、ポジティブに読み取りやすい傾向の者と、ネガティブに読み取りやすい傾向の者がいることがわかる。平均ポジティブ回答率は48.7%(SD=12.4%)であり、Figure 1にその分布を示す。

そこでポジティブ回答率と各心理尺度の得点との関連を検討したところ、いずれの尺度とも相関はみられず(Table 1)、それぞれの心理的特徴がポジティブあるいはネガティブ感情の読み取りやすさと関連しないことが示された。これは、愛着スタイルや抑うつ性と乳児感情の読み取りとの間の関連を示す先行研究(松田, 2015; Zahn-Waxler

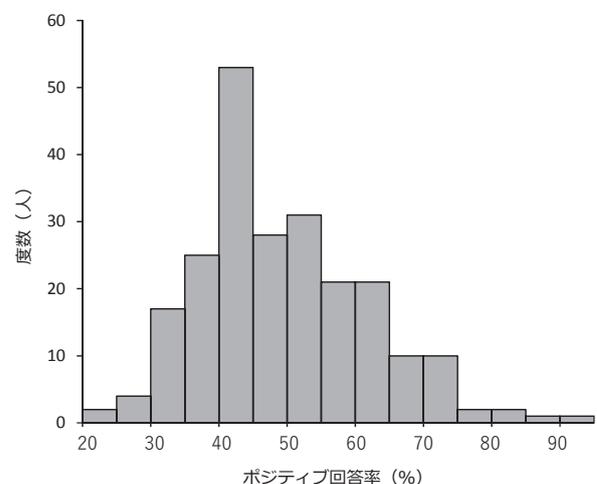


Figure 1 ポジティブ回答率の分布

Table 1 乳児表情写真に対するポジティブ回答率と尺度得点との相関

	愛着スタイル			抑うつ傾向	共感性		
	安定	アンビバレント	回避		感情的 暖かさ	感情的 冷淡さ	感情的 被影響性
尺度得点の平均	2.58	2.63	2.30	2.24	3.07	2.04	2.77
標準偏差	(0.60)	(0.57)	(0.52)	(0.41)	(0.41)	(0.42)	(0.50)
ポジティブ回答率との相関	.109	.009	.018	-.035	-.047	-.046	.027
	<i>ns.</i>						

	育児意識			
	育児労働への 積極性	育児労働の 肯定	育児労働の 否定	育児労働への 抵抗感
尺度得点の平均	3.13	3.09	2.35	3.07
標準偏差	(0.75)	(0.61)	(0.53)	(0.57)
ポジティブ回答率との相関	.096	.063	.051	-.015
	<i>ns.</i>	<i>ns.</i>	<i>ns.</i>	<i>ns.</i>

& Wagner, 1993) と一致しない。松澤 (2017) において今回と同様に先行研究と一致しなかったのは、必ずしも対象者数の少なさによるものではないと考えることができる。

#### 各写真への回答と尺度得点との関連

そこで、30枚の表情写真のそれぞれについて検討した。30枚のうち、9割以上の参加者が同じ反応をした写真（ポジティブ回答率が90%以上、または10%以下）は11枚、7~8割の写真（ポジティブ回答率が70~89%、または11~30%）が6枚で、残る13枚の写真では5~6割（ポジティブ回答率が31%~69%）と回答が割れた（Table 2最上段）。今回用いた乳児表情写真は、はっきりしない弱い表出の写真や、複数の感情が混ざっているかのような多義的な性質を持つ表情の写真が含まれるため、特にそのような写真では回答が割れやすい傾向がある。

次にこれらの写真のそれぞれについて、回答と各心理尺度の得点との関連を検討するために、写真への回答をポジティブとした者とネガティブとした者で尺度得点が異なるかについて *t* 検定を

行った。その結果、有意あるいは有意傾向が見られた組み合わせについて Table 2 に示す。

#### 1) 愛着スタイル

愛着スタイルの安定尺度では、いくつかの写真において、ネガティブ回答をした者に比べポジティブ回答をした者の得点が高かった。例えば、1%水準の有意差が見られた写真25（子どもがあくびをしているような表情； $t(224) = 2.65, p < .01$ ）はポジティブとネガティブで回答が分かれた写真であるが、安定的な愛着スタイルの者のほうがこれをポジティブと読み取る傾向があった。また写真11（真顔で上方をしっかりと見ている； $t(224) = 1.80, p < .10$ ）は、参加者の8割近くがネガティブと回答したが、安定的な愛着スタイルの者にポジティブと回答する傾向がみられた。

愛着スタイルの回避尺度と乳児感情の読み取り傾向との関連は写真によって異なることがはっきり示された。例えば、ほとんどの参加者がポジティブと回答した写真4（得意そうな顔だが、見方によっては悲しそうにも見える； $t(9.35) = 4.04, p < .01$ ）にネガティブと回答をしたのは、回避傾

Table 2 各写真への回答と尺度得点との関連

写真No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15			
各写真のポジティブ回答率 (%)	97.0	1.3	44.0	94.8	66.8	67.7	95.3	70.3	25.9	3.9	21.1	5.6	64.7	89.2	35.8			
<b>愛着スタイル</b>																		
安定																p <sup>†</sup>		
アンビバレント																p*		
回避																N*		
<b>抑うつ傾向</b>																		
																N <sup>†</sup>		
<b>共感性</b>																		
感情的暖かさ																N <sup>†</sup>		
感情的冷淡さ																		
感情的被影響性																		
<b>育児意識</b>																		
育児労働への積極性																	p <sup>†</sup>	
育児労働の肯定																	p*	
育児労働の否定																	N <sup>†</sup>	
育児労働への抵抗感																		
写真No.	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30			
各写真のポジティブ回答率 (%)	3.0	3.9	51.7	3.9	22.0	90.9	96.6	55.6	95.3	57.3	32.8	63.8	9.9	38.4	13.8			
<b>愛着スタイル</b>																		
安定																	p <sup>†</sup>	
アンビバレント																	N <sup>†</sup>	
回避																	p*	
<b>抑うつ傾向</b>																		
																	p**	
																	p*	
																	N <sup>†</sup>	
<b>共感性</b>																		
感情的暖かさ																	N**	
感情的冷淡さ																	N**	
感情的被影響性																		
<b>育児意識</b>																		
育児労働への積極性																		p*
育児労働の肯定																		p <sup>†</sup>
育児労働の否定																		N*
育児労働への抵抗感																		

P: ポジティブ回答の者のほうが得点が高い N: ネガティブ回答の者のほうが得点が高い

\*\* p<.01, \* p<.05, † p<.10 (5%水準で有意差のみられたものには網掛けをした)

向の高い者であった。一方、ほとんどの参加者がネガティブと回答した写真16(顔全体を見ると泣き出しそうに見えるが、若干口角が上がって

る;  $t(225) = 2.20, p < .05$ ) にポジティブと回答したのも、回避傾向の高い者であった。つまり回避的な愛着スタイルの者は、ネガティブな表情から

ポジティブ感情を読み取りやすく、ポジティブ表情からは逆にネガティブ感情を読み取りやすい場合があるといえる。回避傾向の高い者の乳児感情の読み取りの特徴は、ポジティブあるいはネガティブへの一方向のバイアスというより、表情の違いに応じた両方向への読み取りの歪みであるようだ。

愛着スタイルのアンビバレント尺度は回避尺度と逆の傾向が見られた。ほとんどの参加者がポジティブと回答した写真4にネガティブと回答した者のアンビバレント傾向は低く、ほとんどの参加者がネガティブと回答した写真16にポジティブと回答した者のアンビバレント傾向も低い。アンビバレント傾向の高い者は、乳児感情の読み取りにおいてバイアスも歪みも生じづらいことを示す結果といえよう。

これらの結果は、乳児感情の読み取りにおいて、回避傾向がポジティブな読み取りと関連し、アンビバレント傾向がネガティブな読み取りと関連するとした先行研究(松田, 2015)と一致しない。また、これまでの成人感情の読み取りの研究では、一般に回避やアンビバレントといった不安定な愛着スタイルの者は他者感情をネガティブに読み取ることが指摘されてきた(e.g. Fraley, Niedenthal, Marks, Brumbaugh, & Vicary, 2006; 金政, 2005)が、それらとも一致しない。この不一致は用いた写真の性質と関連するかもしれない。先行研究が顔だけをくり抜いたような写真を用いているのに対し、今回用いたJIFP乳児表情写真は1歳児の日常生活のスナップショットに近いものであった。スナップショットでは生活場面の中で表情が解釈されるため、感情の読み取りの際により複雑な解釈が行われる可能性があり、このような条件では、特に回避傾向の者に歪んだ読み取りが生じやすいと考えることができるのではないだろうか。

## 2) 抑うつ傾向

抑うつ傾向と感情の読み取り傾向との関連も写真によって異なった。ネガティブに読み取った者の抑うつ傾向が高かった写真5(ぼんやりした表情;  $t(217) = 1.96, p < .10$ )と29(複数の感情が混じった表情;  $t(216) = 1.80, p < .10$ )はいずれも回答が割れた写真で、その差は有意傾向(10%水準)であった。5%水準で有意差のみられた写真19

(眉間にしわを寄せて泣いているような表情;  $t(9.10) = 4.06, p < .01$ )と写真26(退屈そうな写真で無表情に近い;  $t(214) = 2.29, p < .05$ )は、いずれもネガティブ回答をする者のほうが多かった写真であるが、これらの写真に対してポジティブと回答した者は抑うつ傾向が高い傾向があった。このように本研究では、抑うつ傾向の者はどちらかということ写真をポジティブに読み取る傾向のほうが強く、抑うつ性の高さが乳児感情のネガティブな読み取りと関連するとする先行研究(Zahn-Waxler & Wagner, 1993)と一致しなかった。なお、過去に成人表情写真を用いた複数の研究でも、抑うつ傾向者における他者感情のネガティブな読み取りが指摘されている(Clark & Beck, 1989; Gollan, McCloskey, Hoxha, & Coccaro, 2010)。これらとの不一致の理由として、本研究の参加者の抑うつ傾向が全体的に低く(Table 1 上段参照)、先行研究で対象としていた比較的重篤な抑うつ者が含まれていないことが考えられる。健常の範囲での抑うつ傾向は、乳児感情の読み取りにおいて、場合によってはポジティブなバイアスを生じさせる可能性がある。

## 3) 共感性

共感性の尺度については回避尺度と同様、写真による読み取り傾向の違いがみられ、感情的暖かさが弱く、冷淡さが強い者では、ネガティブな写真をポジティブに、ポジティブな写真はネガティブに読み取る傾向があることが示された。感情的冷淡さは回避傾向と正の相関を示し( $r = .496, p < .01$ )、共通の心性を反映していることが考えられる。感情的被影響性については、いずれの写真についても回答との関連はみられなかった。

## 4) 育児意識との関連

いくつかの写真において、ポジティブに回答したの方が育児労働に対する積極性や肯定感が高かった。これは、ほとんどの者がポジティブと回答している写真1や写真24(いずれも口角が上がっている; 写真1の肯定感  $t(225) = 2.40, p < .05$ ; 写真24の積極性  $t(215) = 2.55, p < .05$ )についても、ネガティブ回答の多かった写真29や写真30(いずれも口角が下がっている; 写真29の積極性  $t(215) = 2.42, p < .05$ ; 写真30の肯定感  $t(213) = 2.03, p < .05$ )についてもあてはまった。逆に、育児労働に対する否定感が高い者は、あい

まいな表情の写真18(下を向いているが感情は弱い;  $t(214) = 2.17, p < .05$ ) をネガティブに読み取る傾向がみられた。育児意識は乳児感情の読み取り傾向から影響を受けることが予想される。乳児表情をポジティブに読み取る者ほど育児へのポジティブな意識をもちやすく、ネガティブに読み取る者ほど育児に否定的な意識をもちやすいのかもしれない。

#### まとめ

心理的な特徴と乳児感情の読み取り傾向との関連のあり方について議論する。本研究では、回避的な愛着スタイルの者や感情的冷淡さをもつ者では、ネガティブな写真をポジティブに読み取り、ポジティブな写真をネガティブに読み取るというような、両方向の読み取りの歪みのようなものが一部の表情写真で認められた。また抑うつ傾向の者に関しては、どちらかというとならネガティブな写真をポジティブに読み取る傾向がみられたが、これも一部の写真についてであり、写真によってはネガティブに読み取る傾向も見られた。これらの結果は、先行研究で指摘されてきたような、回避的な愛着スタイルの者はポジティブ方向、抑うつ傾向の者はネガティブ方向への読み取りのバイアスがあるとする結論(e.g. 松田, 2015; Zahn-Waxler & Wagner, 1993)とは一致しなかった。この結果の不一致は、先に議論したように対象者の違いと関連するかもしれないが、少なくとも本研究で対象としたような比較的健康的な女子青年においては、愛着スタイル、抑うつ傾向、共感性といった心理的特徴と乳児表情からの感情読み取りとの関連は、表情の種類や場面によって異なるということができよう。そして、回避的な愛着スタイルや感情的冷淡さをもつ者、あるいは抑うつ傾向の者では、表情や場面によってときどき歪んだ読み取りをしてしまうことが示唆されたということができようではないだろうか。

実際の育児場面では、表情だけでなく、表情が表れた文脈やその乳児の特性などの手がかりがあるため、今回の課題場面より感情の推測ははるかに容易であり、読み取りの個人差も小さくなることが予想される。しかし、日常生活の中で乳児が見せる表情には、種類や強弱の違い、あるいは異なる感情の混合などさまざまなものがあり、周囲の大人は各自の心理的な状態や経験に基づいて、

その表情に対する解釈を行う。そしてその解釈に基づいて、乳児に対する感情や認識が形成されるとともに、対児行動が選択される。乳児感情の読み取りは、養育者と乳児の関係を左右する最も基本的な要素の1つといえよう。本研究からは、このような乳児感情の読み取りには少なからぬ個人差があることははっきりしたが、一方でその個人差と心理的な特徴との関連は単純でなく、心理的な特徴に基づく感情読み取り傾向の予測は困難であることが考えられる。

なお、冒頭で述べたように、筆者が乳幼児を養育中の父母を対象に行った研究では、回避的な愛着スタイルをもつ父母や、抑うつ傾向の父母では、乳児感情を読み取る際の前頭前野の活動性が弱く、またそのような父母ほど育児困難感が高い傾向が示された(松澤, 2017)。本研究の結果から、回避的な愛着スタイルの父母や抑うつ傾向の父母にみられた、乳児感情の読み取りの際の前頭前野活動の弱さは、表情の種類や場面によってはときどき乳児感情を歪んで読み取ってしまうということと関連する可能性が考えられる。このときどき生じる歪んだ読み取りが育児に対する困難感につながるということが予想されるのではないだろうか。

#### 謝辞

本研究は平成29・30年度昭和女子大学研究助成金の助成を受けて実施しました。実験に協力してくださった皆様にお礼を申し上げます。

#### 引用文献

- 青木まり・松井 豊 (1988). 青年期後期における女性性の発達(II): 異性性と母性準備性の構造について 北海道教育大学紀要, 第一部, C, 教育科学編, 39, 85-94.
- Butterfield, P. M. (1993). Responses to IFEEL pictures in mothers at risk for child maltreatment. In R. N. Emde, J. D. Osofsky, & P. M. Butterfield (Eds.), *The IFEEL pictures: A New Instrument for Interpreting Emotions* (pp. 161-173). Madison, CT US: International Universities Press, Inc.

- Clark, D. A., & Beck, A. T. (1989). Cognitive theory and therapy of anxiety and depression. In: P. C. Kendall, & D. Watson, (Eds.), *Anxiety and depression: Distinctive and overlapping features* (pp. 379-411). Academic Press.
- Emde, R. N. (1993). A framework for viewing emotions. In R. N. Emde, J. D. Osofsky, & P. M. Butterfield (Eds.), *The IFEEL pictures: A New Instrument for Interpreting Emotions* (pp. 3-25). Madison, CT US: International Universities Press, Inc.
- Fraley, R. C., Niedenthal, P. M., Marks, M., Brumbaugh, C., & Vicary, A. (2006). Adult attachment and the perception of emotional expressions : Probing the hyperactive strategies underlying anxious attachment. *Journal of Personality*, 74, 1163-1190.
- 福田一彦・小林重雄 (1973). 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神神経学雑誌, 75, 673-679.
- Gollan, J. K., McCloskey, M., Hoxha, D., & Coccaro, E. F. (2010). How do depressed and healthy adults interpret nuanced facial expressions? *Journal of Abnormal Psychology*, 119, 804-810.
- Inoue, K., Hamada, Y., Fukatsu, C., Takiguchi, T., & Okonogi, K. (1993). The Japanese IFEEL Pictures. In R. N. Emde, J. D. Osofsky, & P. M. Butterfield (Eds.), *The IFEEL pictures: A New Instrument for Interpreting Emotions* (pp. 299-308). Madison, CT US: International Universities Press, Inc.
- 金政祐司 (2005). 自己と他者への信念や期待が表情の感情認知に及ぼす影響—成人の愛着的視点から— 心理学研究, 76, 359-367.
- 加藤隆勝・高木秀明 (1980). 青年期における情動的共感性の特質 筑波大学心理学研究, 2, 33-42.
- 松田久美 (2015). 母親の内的作業モデルが乳幼児の顔表情からの感情の読み取りに与える影響 北翔大学生涯学習システム学部研究紀要, 15, 31-45.
- 松澤正子 (2017). 乳児感情の読み取りにおける前頭前野活動と心理的特徴の関連：乳幼児を養育中の父母を対象として 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 19, 1-10.
- 日本IFEEL Pictures研究会 (2003). 日本版IFEEL Pictures 第二版 (未公刊)
- 佐々木綾子 (2007). 親性準備性尺度の信頼性・妥当性の検討 福井大学医学部研究雑誌, 8, 41-50.
- 戸田弘二 (1988). 青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル：作業仮説 (working models) からの検討 日本心理学会第52回大会発表論文集, 27.
- Zahn-Waxler, C., & Wagner, E. (1993). Caregivers' interpretations of infant emotions: A comparison of depressed and well mothers. In R. N. Emde, J. D. Osofsky, & P. M. Butterfield (Eds.), *The IFEEL pictures: A New Instrument for Interpreting Emotions* (pp.175-184). Madison, CT US: International Universities Press, Inc.
- Zung, W. W. (1965). A self-rating depression scale. *Archives of General Psychiatry*, 12, 63-70.